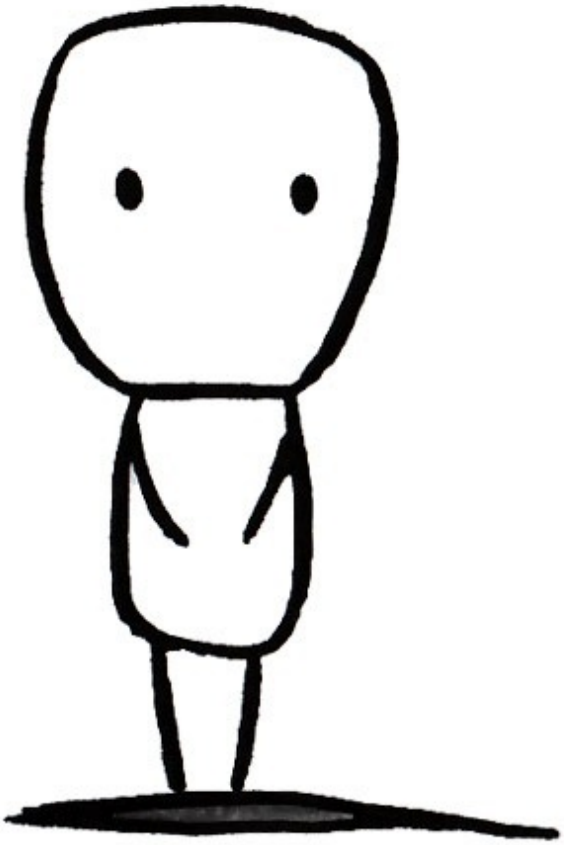


第一章

「オレンジ色のビー玉」

オレンジ色のビー玉

カラカラ　コロン
カラカラ　コロン

この世で　いちばん　きれいなものを
この世で　いちばん　あたたかいものを

ぼくは　ちゃんと　知ってるよ

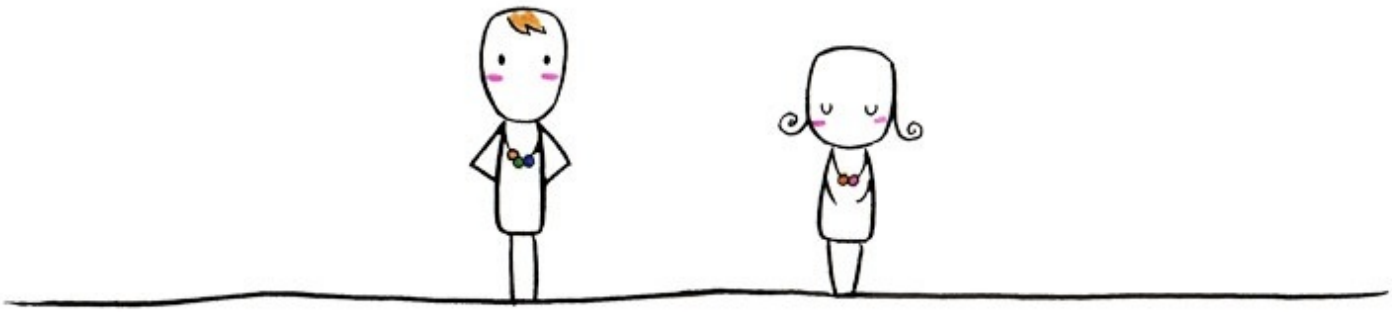
オレンジ色のビー玉

この国の　ひとは
みんな　ビー玉が　大すき

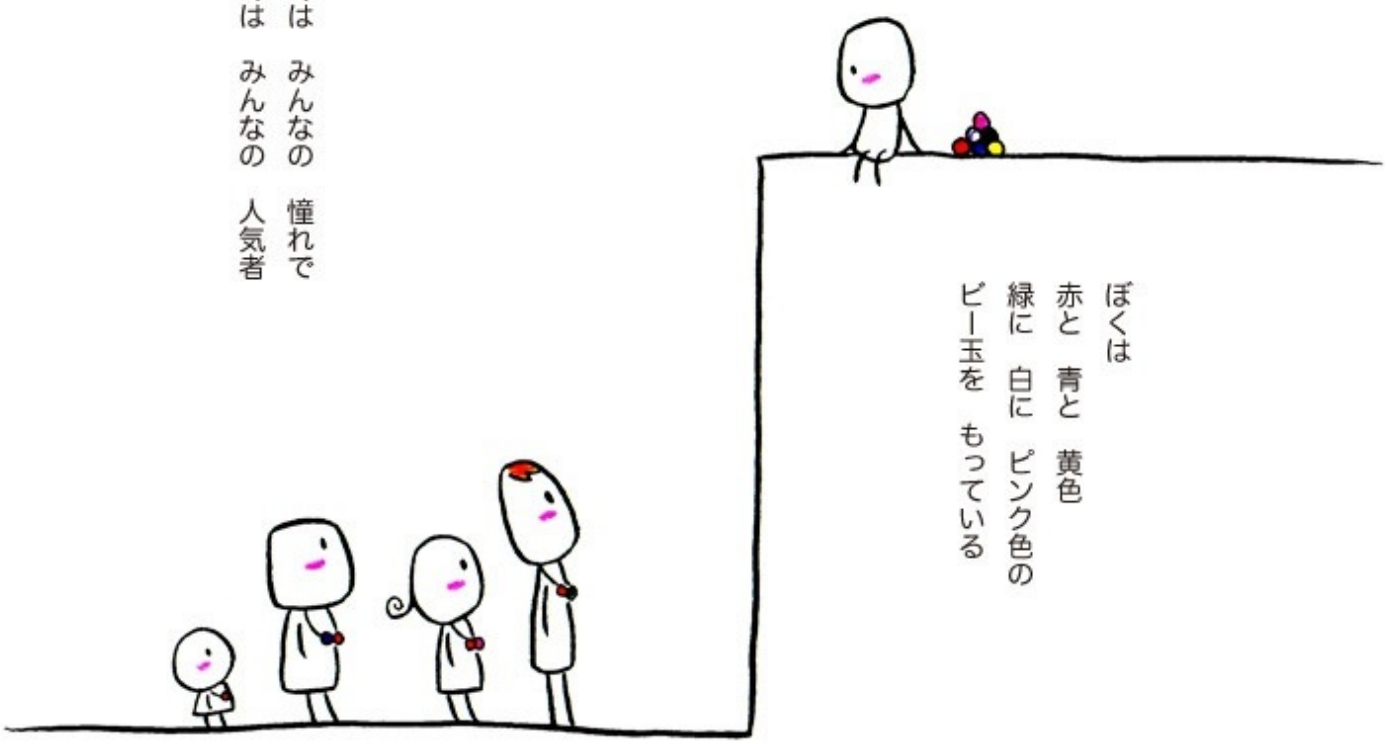
みきちゃんは
ピンクと　オレンジ色の
ビー玉を　もっている

けんちゃんが
もっているのは
青と　緑と　オレンジ色

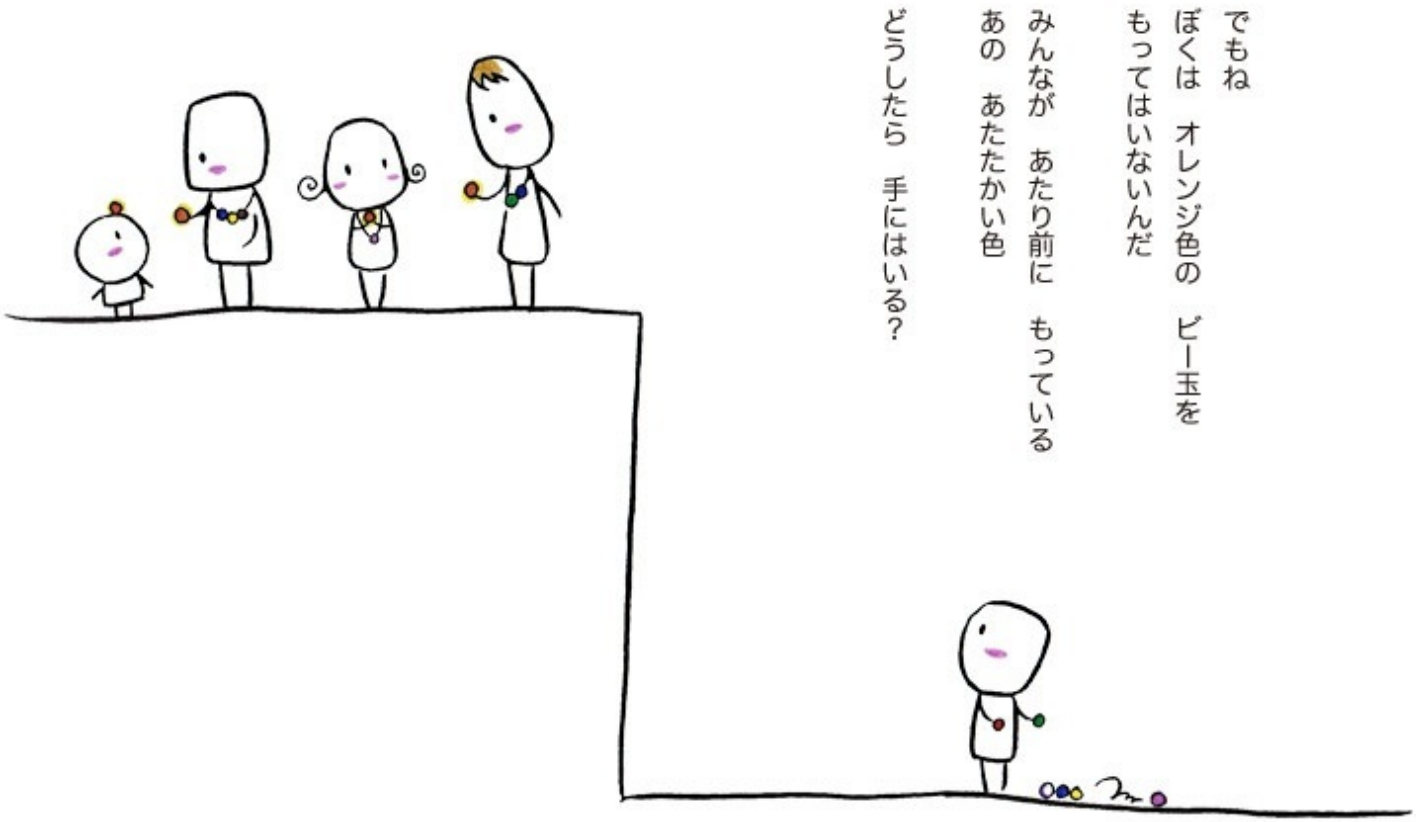
みんな　それぞれ　首からさげて
カラカラ　コロンと　音を出す



オレンジ色のビー玉



オレンジ色のビー玉


でもね
ぼくは　オレンジ色の　ビー玉を
もってはいないんだ
みんなが　あたり前に　もっている
あの　あたたかい色
どうしたら　手にはいる？

オレンジ色のビー玉

ある日
ぼくは　キレイな　女のひとに
出会った

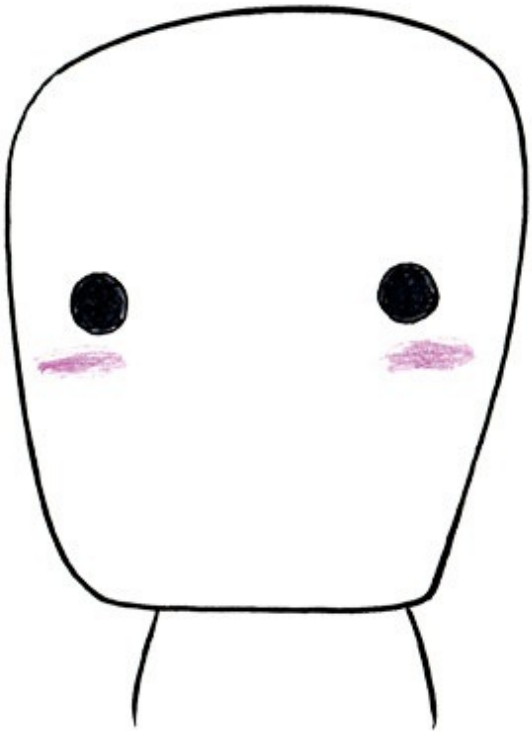
「あなたは　たくさんの
ビー玉を　もっているのね
うらやましいわ」

そのひとは　オレンジ色の　ビー玉しか
もっていなかった

「こんな　平凡な　ビー玉
大きらい」

オレンジ色のビー玉

そのひとは　自分の　ビー玉を
長い　つめで　はじいた



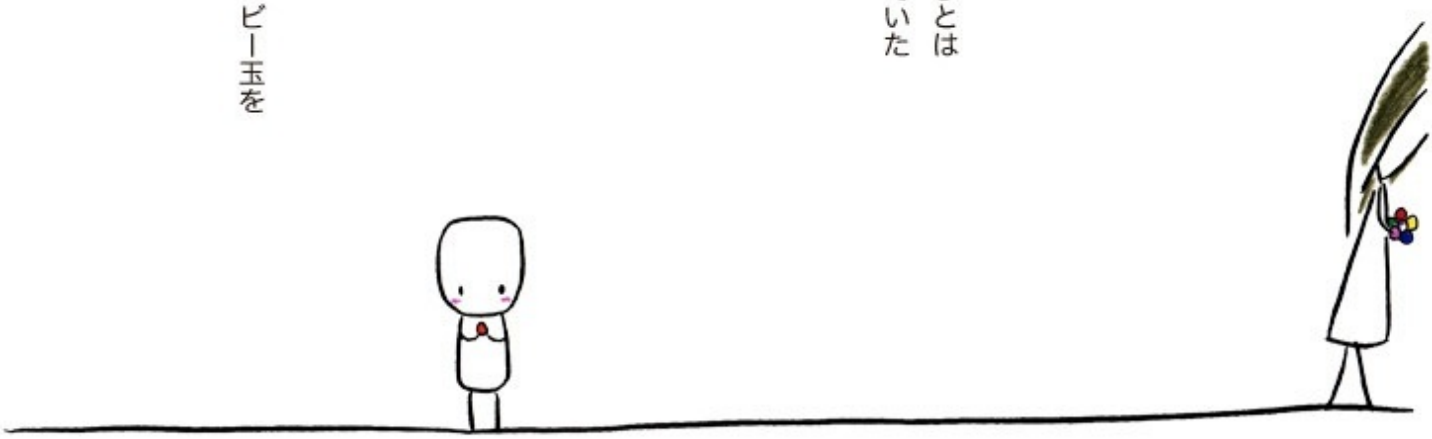
ぼくが
ほしくて　ほしくて　たまらなかった
オレンジ色の　ビー玉を…

オレンジ色のビー玉

ぼくは　そのひとに
もっていた　ビー玉を
全部　あげた

とても　喜んだ　そのひとは
ぼくに　自分の　もっていた
ビー玉を　くれた

こうして
ぼくは　オレンジ色の　ビー玉を
手に　いれた



数年後
どこからか
女のひとの　声がする

「この世で　いちばん　きれいなものを
この世で　いちばん　あたたかいものを
どうか　お願い　返してください」

だめだめ
これは　ぼくのもの
なくしたものは　かえらない

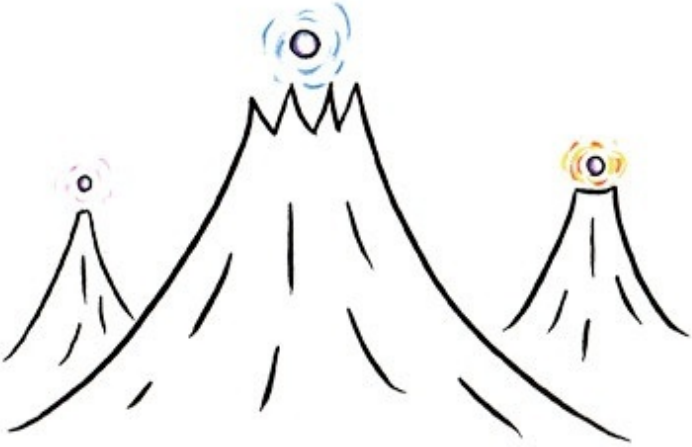
第二章

「白いビー玉」

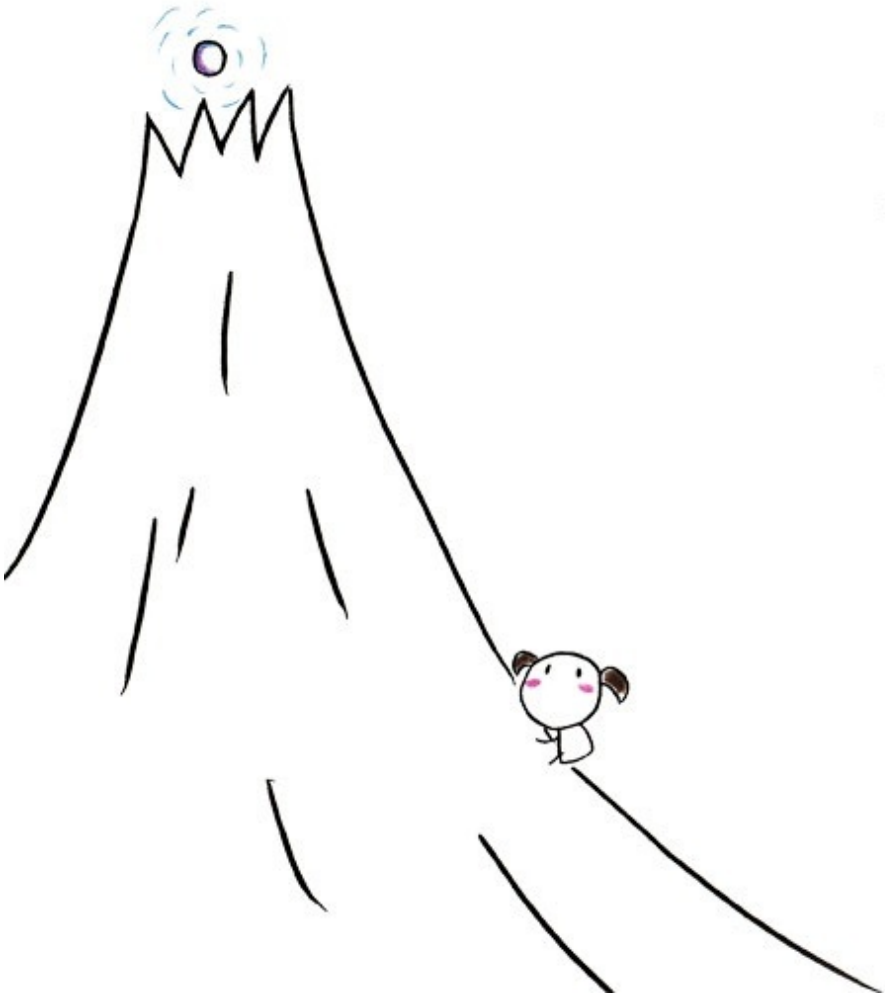
白いビー玉

高い　山の　てっぺんに
フワリと　ひかる　ビー玉の

みんなが　ほしがる　きれいな色
みんなが　みとれる　白い色



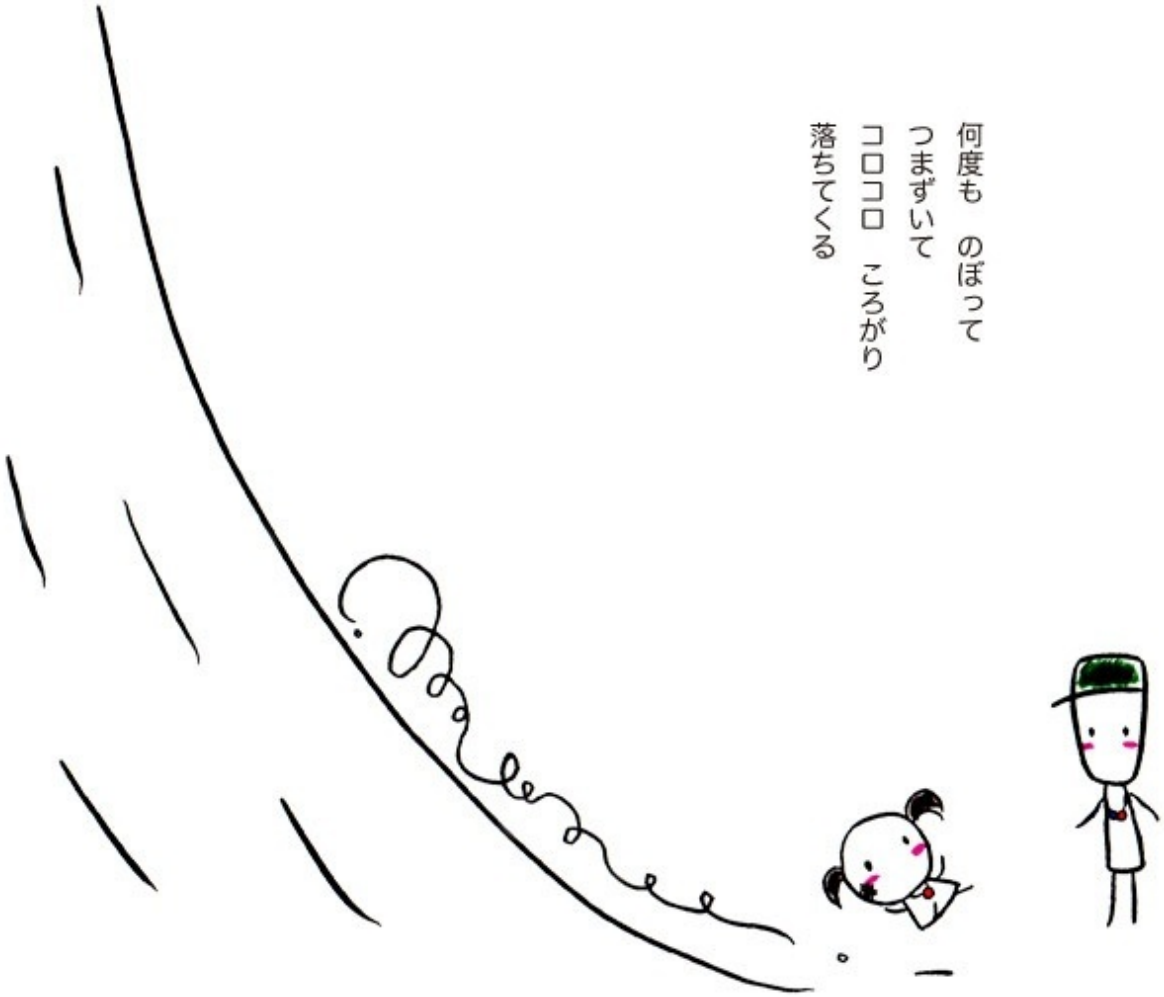
白いビー玉



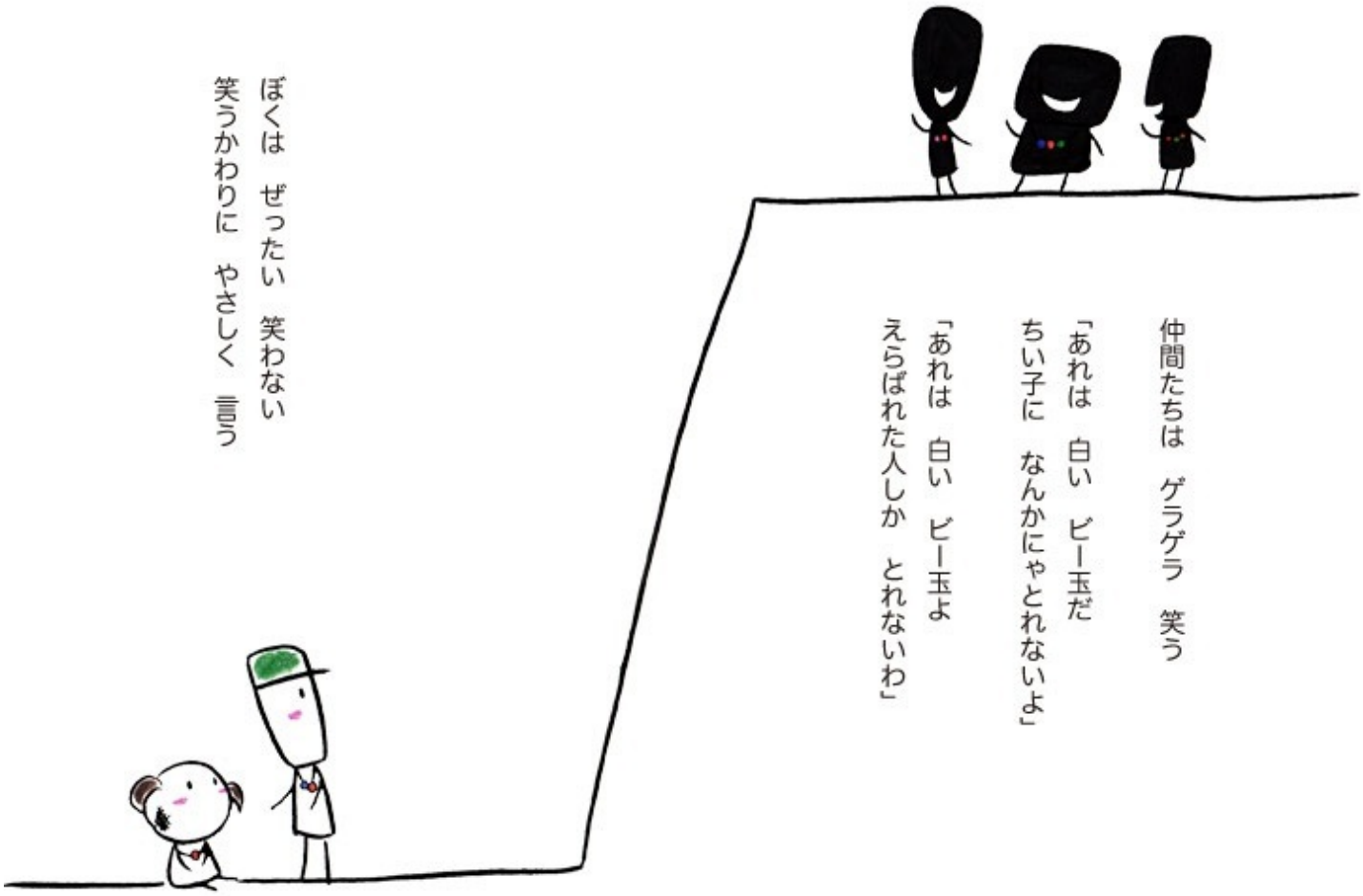
ちい子は　みんなに　笑われる
バカな　ヤツだと　笑われる

白い　ビー玉を　めざして
高い　山を　のぼるから
毎日　毎日　のぼるから

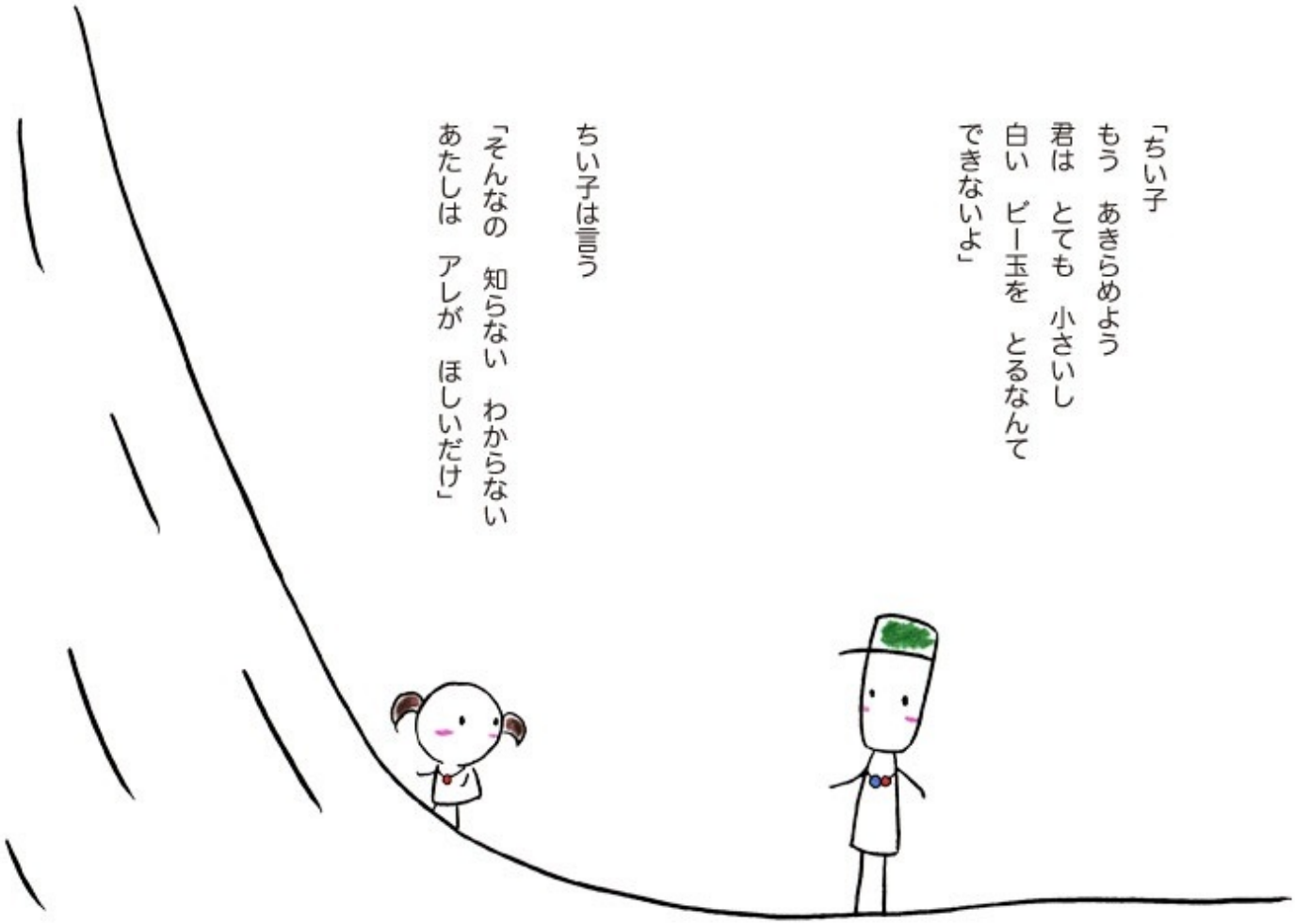
白いビー玉



白いビー玉

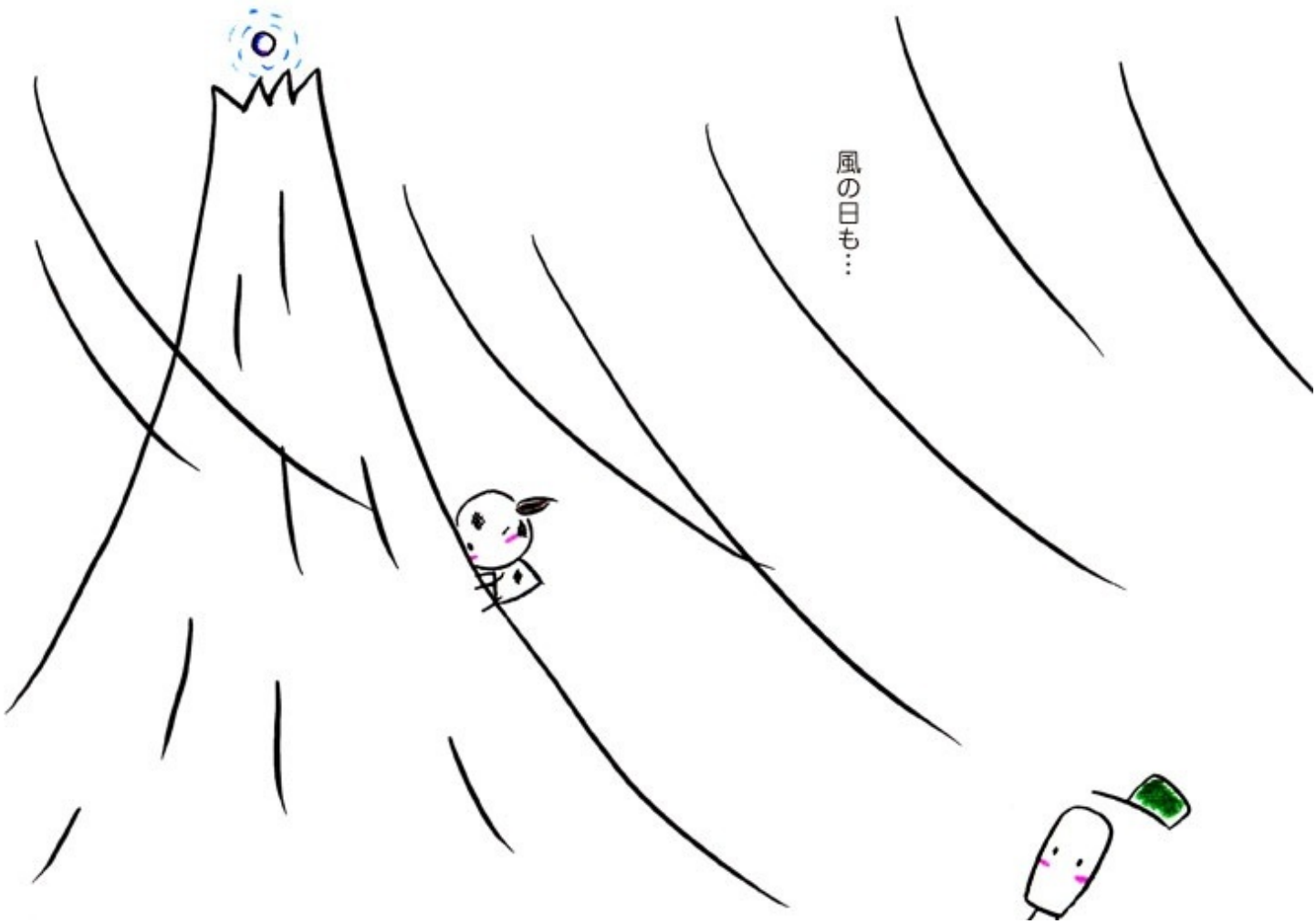

仲間たちは　ゲラゲラ　笑う
「あれは　白い　ビー玉だ
ちい子に　なんかにゃとれないよ」
「あれは　白い　ビー玉よ
えらばれた人しか　とれないわ」
ぼくは　ぜったい　笑わない
笑うかわりに　やさしく　言う

白いビー玉


「ちい子
もう　あきらめよう
君は　とても　小さいし
白い　ビー玉を　とるなんて
できないよ」
ちい子は言う
「そんなの　知らない　わからない
あたしは　アレが　ほしいだけ」

白いビー玉

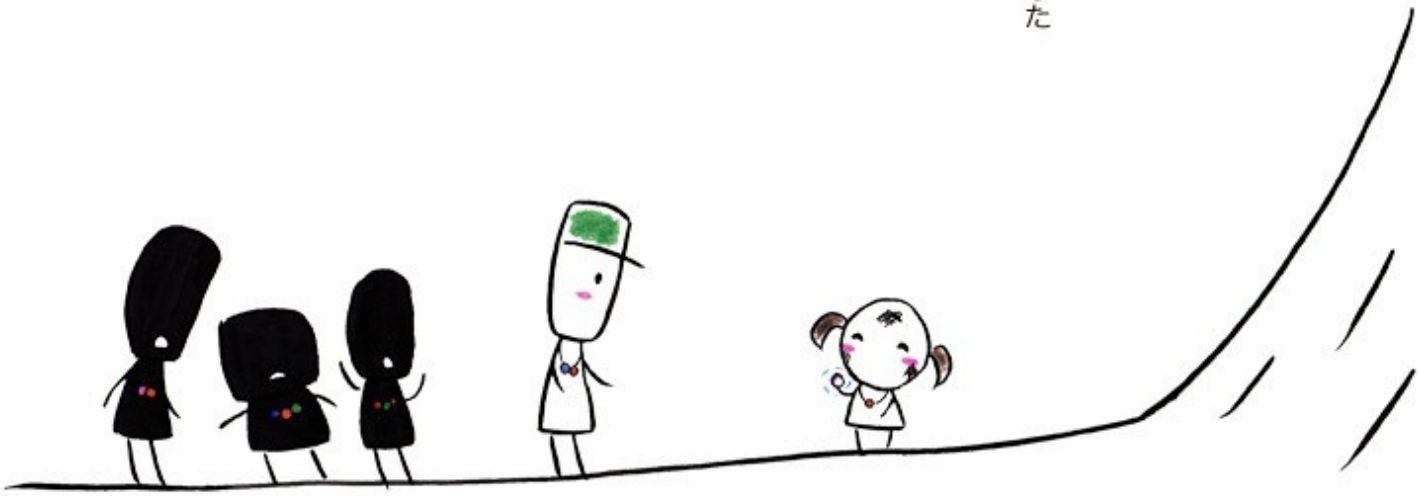
白いビー玉



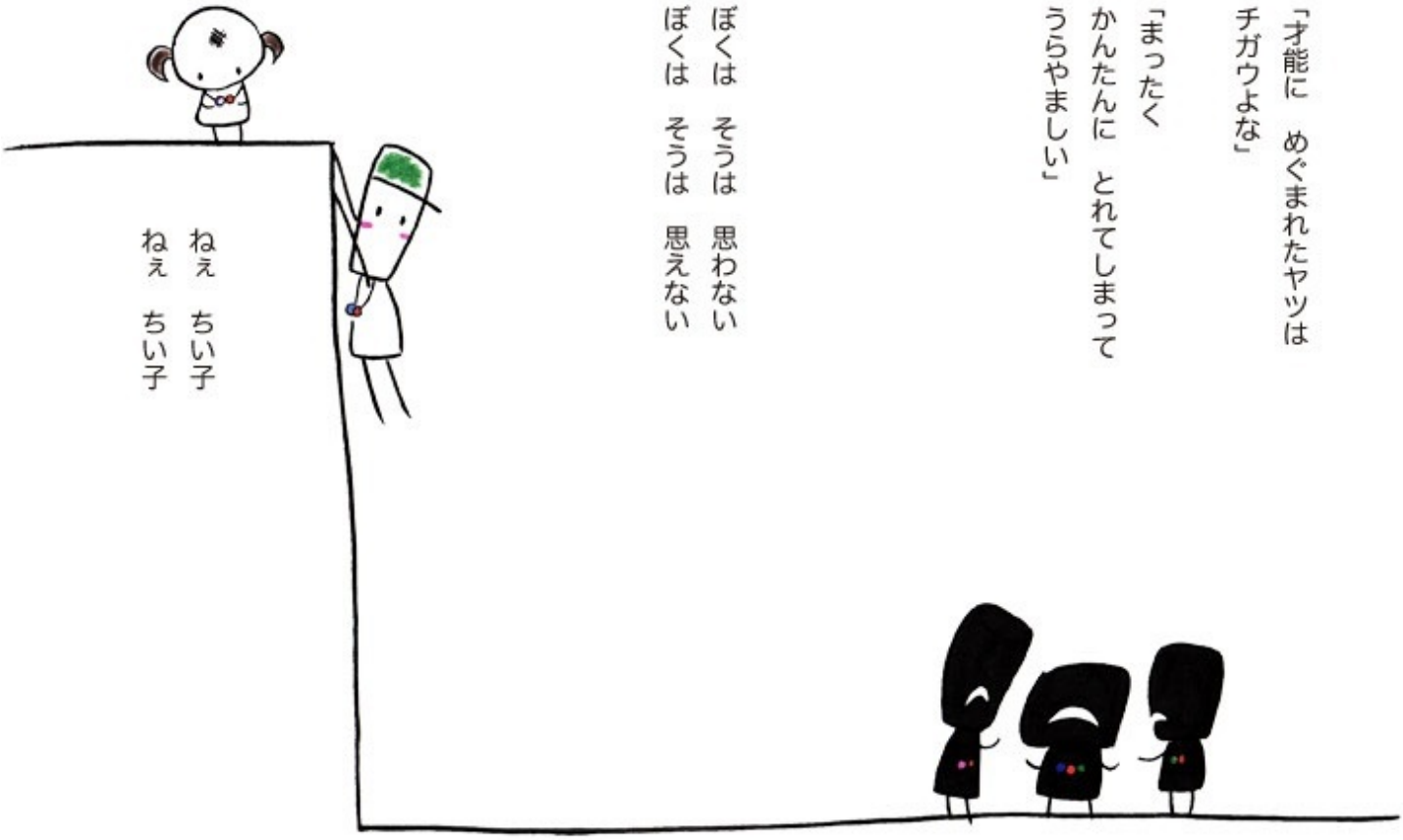
白いビー玉

ある晴れた日
ついに　ちい子は
白い　ビー玉を　とってきた

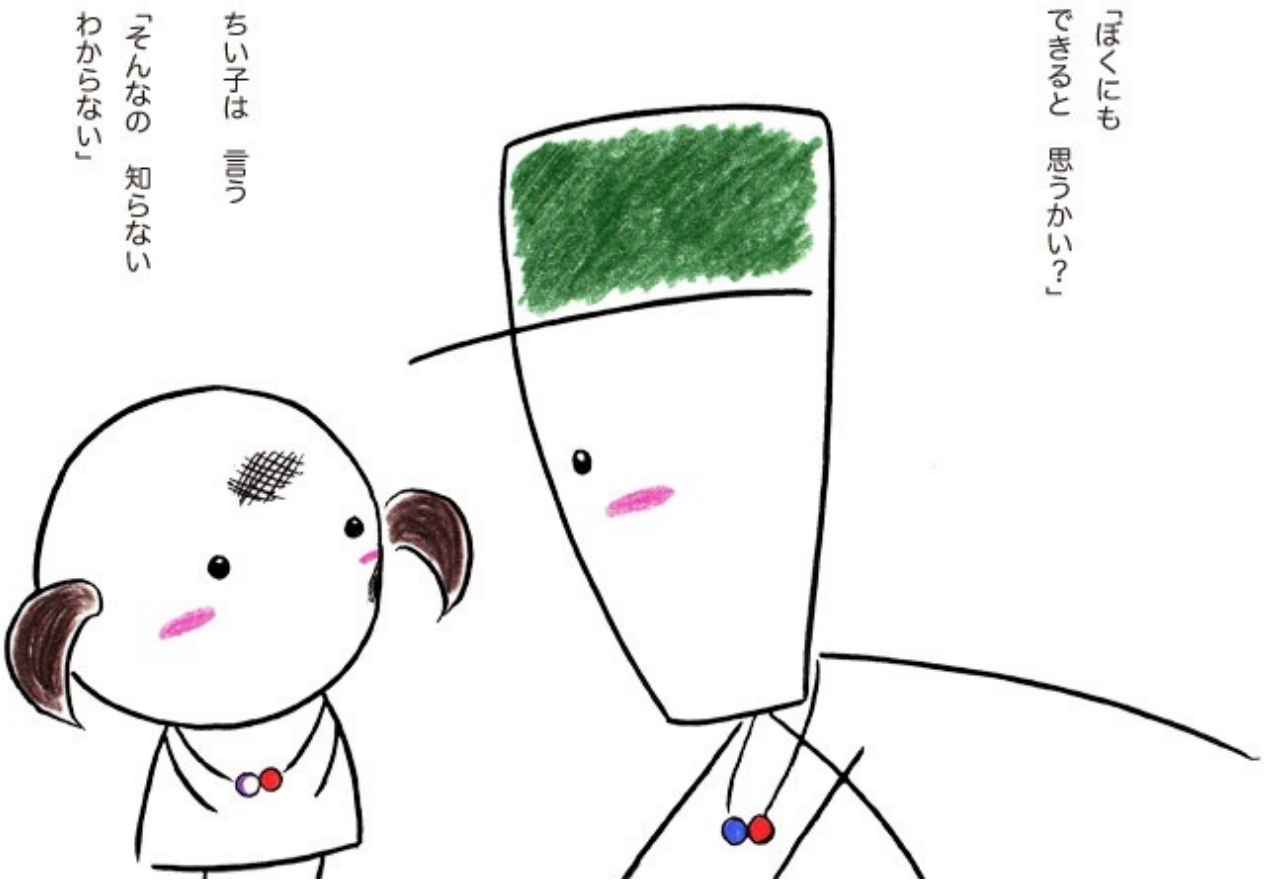
仲間たちは　おどろいて
ひそひそ　こそこそ
話しだす

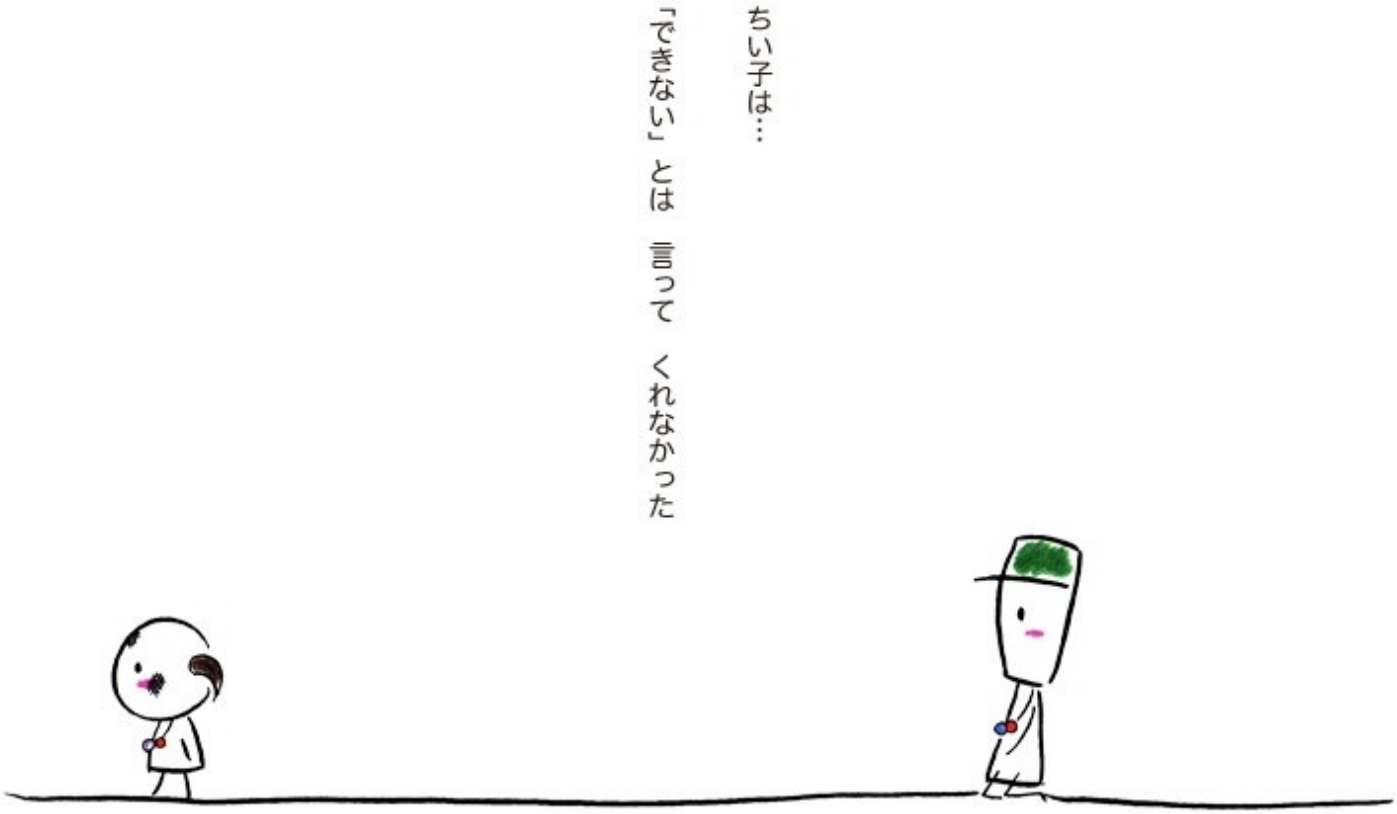


白いビー玉

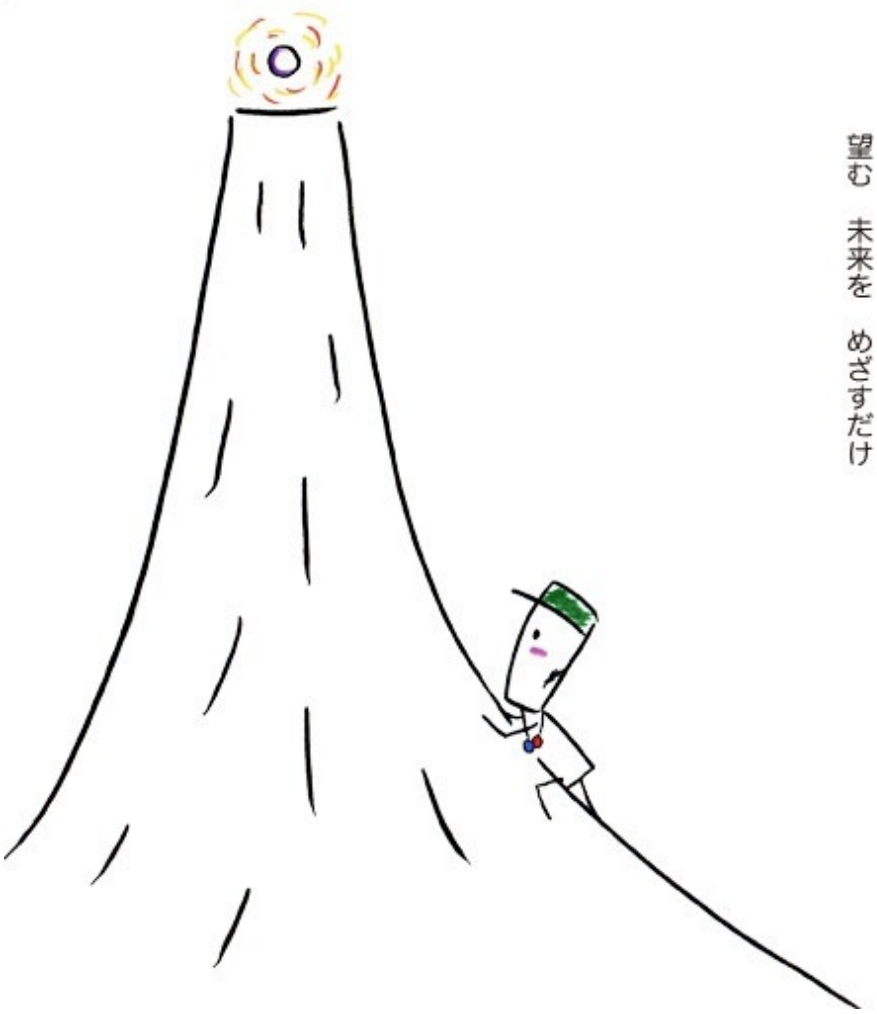

「才能に　めぐまれたヤツは
チガウよな」
「まったく
かんたんに　とれてしまって
うらやましい」
ぼくは　そうは　思わない
ぼくは　そうは　思えない
ねぇ　ちい子
ねぇ　ちい子

白いビー玉




ちい子は…
「できない」とは 言って くれなかった

白いビー玉



ゲラゲラ　クスクス　笑い声
ひそひそ　こそこそ　話し声

それでも　ぼくは　気にしない

目の前の　山を　のぼるだけ
望む　未来を　めざすだけ

第三章

「幸せのビー玉」

カラカラ　コロン
カラカラ　コロン

この世で　いちばん　きれいなものが
この世で　いちばん　あたたかいものが

私は　何か　知ってるわ

幸せのビー玉

「キレイな　キレイな
お姉さん
どうして　そんなに
泣いてるの？」

「大切な　オレンジ色の　ビー玉を
失って　しまったからよ」

「じゃあ　あたしの　ビー玉
あげようか？」

「だめよ
それは　とても　大事なもの
ひとに　あげては　いけないわ」

「じゃあ
ビー玉のかわりに…」

「あたしが　そばに　いてあげる」

カラカラ　コロン
カラカラ　コロン

ビー玉が　つむいだ　物語
色あざやかな　物語

おしまい